

まえがき

恒例の、世相を表す言葉として、二〇一一年度は「絆」という漢字を「漢字能力検定協会」が年末に発表し、マスコミを通じ全国に知れ渡り、国民は一樣に納得感を抱いたような印象をおぼえたものであった。「絆」と聞けば、つながり、かわり、ご縁という意味がただちに浮かび、仏教の最も重要な教えである「縁起」を連想させる。

昨秋、国民文化祭が催された際、京都府が将来にも継承したい日本人の心はなんであるかを全国的にアンケート調査したところ、「おもいやり」であることが報告された。「おもいやり」も仏教の最も重要な教えである「慈悲」を連想させる。

「絆」も「思いやり」も、自己中という言葉に象徴されるような現代社会において最も欠けていて、そうであればこそ蘇らせねばいけない心情ではなからうか。これらの言葉が登場したのは、3・11の東日本大震災が契機になっていることはまちがいな

かろう。しかし、同時に日本人の心の奥底に無意識のうちに、仏教の基本思想に通じるこれらの言葉が薫習されてきたことを欣快に思う。

昨年は、法然上人八〇〇回、親鸞聖人七五〇回の大遠忌が勤修された年でもあった。浄土の教えの絆が、日本仏教を代表する二人の偉大な宗祖のご教化によって連続と継承され、日本人の血となり肉となつていることに報恩の誠をささげ、次世代へ委託する責務の一端を担わねばならないと思考する昨今である。

本誌は本学の学生を対象に例年開催される「宗教講座」における講話を収録している。講師、講題はさまざまであるが、「いのち」「出遭い」「絆」「思いやり」への言及が通底としてあるようにおもえる。本誌をご一読いただき読者の心の潤いになればと念ずるところである。

平成二十四年三月十九日

京都光華女子大学・同短期大学部

学 長 一 郷 正 道